

なごり雪

昭和37年3月20日、この日私は大学を卒業した。卒業式の後恩師を囲んでの謝恩会があり、その折級友とお互いの帰省日を確認し合った。というのも、当時はそのまま東京に残って就職するという者は少なく、そのほとんどは郷里に職を求めるといのが普通だった。もちろん、私もその一人であった。

帰省のトップは岩手の盛岡に帰るR君で、卒業式三日後の23日夜だった。ところが、その日は朝から雨だったが夕方には雪に変わり、杉並に下宿していた私は上野駅に駆けつけるのに難渋した。寒さに備えセーターの上にオーバを着込んで、遅れてはならじと昼食もそこそこに出掛けたのだった。

上野に着くと既に何人かの友が待合室にいた。送られるR君はまだのようで、友は口々に彼のことより降りしきる雪のことを話題にしていた。一人が『涙雨』という言葉があるが、東北の人間には雨よりこの雪の方が相応しいかもしれぬな」というと、「明日の俺の帰省も雪がいいな」と静岡のM君。

そんな雑談をしているところに主人公が到着して、皆連れ立ってホームへ。律儀なR君はそこで「今日はありがとう。この感激は一生忘れません。皆を見送ることは出来ないが、お達者で」と言って列車に乗

り込み、ホーム側の窓を開けた。期せずして皆から「バンザイ」の声が起こった。

彼は我々が見えなくなるまで身を乗り出し手を振り続けていた。彼の間には雪が絶えず降り続いていて、すぐにテールランプの灯も見えなくなった。が、このシーンを傍からみれば映画のワンカットのようには見えなくもなく、私は私で感傷的になり自然と涙が頬を伝わり落ちたのだった。

そんな気分も束の間、リーダー格のG君が

「明日はM君だな。明日は東京駅だから間違えないように」と言って解散したが、この調子なら明日も雪かもしれないながら、中央線の車窓から降りしきる雪を一人眺めながら家路についた。しかし、翌日は晴れて雪も消え、M君はしきりに残念がっていた。

こうして次から次と友を見送り、いざ自分の番には見送る人は東京人のOさんのみだった。この時つくづく、「早く荷物をまとめて帰るべきだった」と思ったが、後の祭り。そのOさんが「車中で読んで」と言っ
て渡されたのがゲーテの言葉を集めた『神・自然・芸術・人生』。今でも書棚にあるが、その日はよく晴れ、雪とは無縁の帰省となった。